

令和 2 年度秋田県総合政策審議会第 2 回ふるさと定着回帰部会（議事録要旨）

1 日時 令和 2 年 8 月 1 1 日（火） 1 3 : 3 0 ~ 1 5 : 3 5

2 場所 議会棟 大会議室

3 出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

加藤 未希（合同会社 C H E R I S H 代表社員）

須田 紘彬（株式会社あきた総研代表取締役）

竹内 健二（株式会社 L H L 取締役）

能登 祐子（能代市自治会連合協議会会長）

【県】

久米 寿（あきた未来創造部次長）

水澤 里利（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）

佐藤 裕之（あきた未来創造部あきた未来戦略課政策監）

三浦 卓実（あきた未来創造部移住・定住促進課長）

信田 真弓（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課長）

新号 和政（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課政策監）

橋本 秀樹（あきた未来創造部地域づくり推進課長）

村田 詠吾（企画振興部市町村課長）

千葉 圭司（健康福祉部国保・医療指導室長）

鈴木 慎一（建設部技術管理課技術管理監）

4 あいさつ（久米あきた未来創造部次長）

- ・ 先月の第 1 回の会合では、若年層の流出対策、子育ての意識醸成、或いは地域づくり活動の支援のあり方等、各分野にわたり皆様の日頃の活動や経験に基づいた御意見を頂戴し、感謝申し上げます。
- ・ 1 回目の会合から約 1 か月が経過したが、新型コロナウイルス感染症は拡大の一途をたどり、生活者目線でも危惧されるような状況が続いているが、県の業務面への影響も非常に多大なものがあり、保健や医療対策といったの直接の対策分野にとどまらず、私どもの人口減少対策等の各事業においても、就職説明会や相談会・交流会といった対面式のイベントが軒並み中止・延期、或いは代替手段としてオンラインでの開催といった新たな手法の導入も含め、大きな変化にさらされている。
- ・ 私どもの想定した事業の実施が制限なり制約されているという状況は、外部の予想外

の要因によって立ち止まることを余儀なくされているという面もあるが、同時に、事業や対策のあり方をしっかり見つめ直して、問いかけ直すチャンスでもあると前向きに捉えたいと考えている。

- ・ 当部会が担当する分野は4つあり、移住定住の促進に始まり、ライフステージに応じた結婚・出産・子育てへの支援、或いは女性の活躍推進、そして活力ある地域社会づくりと非常に多岐にわたり、裾野の広いものがあるが、それぞれの分野において、時代の変化の中にあっても守っていくべき硬い核となるような部分もあれば、逆に時代や情勢の変化を反映して積極的に変えていかなければいけないような部分もあろうかと考えている。
- ・ 本日は、こうした点も視野に入れながら、各分野ごとの課題や効果的な取組の進め方について更に御検討いただきたく、前回の発言内容や各分野の課題論点を集約した資料を用意しているので、忌憚のない御意見を頂戴できればと考えている。
- ・ いずれの人口減少対策の分野も、一朝一夕には成果が現れづらいものと思っているが、それだけに、新たな挑戦を繰り返してその振り返り評価に基づきながら、取組を絶えずローリングしていく、そういったことが大切かと考えている。
- ・ 限られた時間の中で大変恐縮であるが、積極的な御意見・御助言をお願い申し上げ、挨拶とさせていただきます。

5 議事

(1) ふるさと定着回帰部会の提言について

□水澤あきた未来戦略課長

提言に向けての主な論点について、部会資料－1により説明

□信田次世代・女性活躍支援課長

専門部会の御意見を伺いたい事項について、部会資料－3により説明

●須田紘彬部会長

- ・ 最初に今日の意気込みや近況報告など、何か一言、御挨拶いただいてから進めていきたい。

●加藤未希委員

- ・ 8月と言えば竿灯の時期で、私自身も高校生から毎年参加していたので、今年は音もなく静かな夏で8月になった気がしていない。気付いたらもうお盆ということで、ちょっとびっくりしてるところである。
- ・ コロナの時期でなかなか外出できないが、子供との時間を見直すきっかけになっているとポジティブに考えて生活していこうと思っている。
- ・ 今日は多くの方々のお話を聞きながら、新しい発想などが生まれたら良いと思うので、

今日もよろしくお願いします。

●竹内健二委員

- ・ 最近、たぬきの罠にかかってしまった猫で子猫が4匹いるという親猫を妻が発見し、確保して、手術代が15万円かかったという話が直近の手痛い出費であった。
- ・ 無理矢理つなげてしまうが、この母猫と子猫を支援しながら感じた家族の在り方、浮かんだアイデアを今日の議論の中で活用していきたいと思う。本日もよろしくお願いします。

●能登祐子委員

- ・ とうとう能代でもコロナウイルスの発症者が出てしまい、いろいろな会議が今中止になろうとしている。
- ・ そうした中でリモートの重要性も感じており、本当に社会が変わってきていると感じている。
- ・ コミュニティビジネスをしており、地域コミュニティの店舗を開設しているが、移住された方、活躍しているドライフルーツのお店の御夫婦やそれに関連した秋田県の素晴らしいデザイナーさんなど、いろいろな方が7月から8月にかけていらっしゃった。また、「おらほの産科小児科を守る会」の皆さんが、うちのお店を貸し切りで使ってください、子育ての悩みなどを助産師さんと話し合っているのを聞き、「なるほど」と思うことがとても多かった。
- ・ やはり地域コミュニティを維持するには、若い人たちのサポートが必ず必要であり、行政の皆さんにも協力していただかないと成り立たないことである。
- ・ 正解というものはないと思うが、皆さんと一緒にいろいろな対策を考えていきたいと思うので、今日もよろしくお願いします。

●須田紘彬部会長

- ・ 県の事業と個人の方の話と二つある。
- ・ 地域づくり推進課において、若い人たちの「何かしたい。けど、何をしたいか自分では思いつかない」、「1人で行動するのは怖い」というような人向けの事業を受託し推進しているが、50名の方々を励ましたり勉強していったりするという事で、一昨日は自分の肩書きについてプレゼンテーションするというイベントを行った。
- ・ 皆さんは今までは「人前で話すなんて嫌だ」「プレゼンテーションなんてしたくない」というような意見が非常に多かったが、やってみると「話すって楽しい」とか、話すと誰かが「こんなアイデアもあるよね」というふうにアイデアに乗っかり合うということにすごく面白みを感じてくれて、やって良かったなと思っているが、何を言いたいかというと、「言うときに人の目が一番気になるということが、何かチャレンジや物事

が変わっていくときに非常に大きなハードルになるんだな」と感じている。

- ・ 県民もいろんな価値感の方がいると思うし、県も我々もどう見られるかというのは非常に気になるころではあるが、この事業や今回の意見を通じて本当に県にとって必要な事業を皆で考えていけたらと思っている。
- ・ 個人の方の話では、仕事や会社関係ではなく市民活動で、ママのキャリアアップの団体を立ち上げたところに参加している。なぜ私が参加してるかというと、ママがキャリアアップするには、必ず男性の理解が必要になってくるということもあるので、女性活躍というキーワードで女性だけが事業の対象者ではないなということも、改めて感じた1か月であった。

●須田紘彬部会長

- ・ 部会資料－1を見ながら項目1から12について、順に御意見をいただきたい。
- ・ 分野1－1の「移住や若者の回帰・定着に向けた情報発信」について、御意見はないか。
- ・ 皮切りに私から一つお話させていただくと、今回、先ほどお話しした地域づくり推進課の事業の中で、すごく対象のふんわりした「何かしたいんだけど、自分では頑張れない人を集める」という集客のところが、最初は非常にネックであった。
- ・ 定員50名の方を1年間サポートしていくというもので、1年間という期間と何をするのかということを理解しきれない中で応募してもらうということは、非常に集客のハードルが高いと思っていたが、蓋を開けてみると、82名の応募の中から50名を選抜させていただくという形になった。
- ・ 要因を紐解いてみると、やはりターゲットを明確にしつつ、そのターゲットに刺さるコンセプトを非常に時間かけて作ったことが良かったと思う。集客ということにおいては、募集期間というよりはやはりターゲットの明確化の方が必要であると思っており、前回もお話をさせていただいてはいるが、どういう人がどういうことに引っかかるのかということ、チャンネルを分けてたくさんのイメージ像を作っていた方が良いと思う。
- ・ 「大学生なのか」「大学生の中でも比較的レベルの高いことをしている大学生なのか」「それとともとりあえず進学をした大学生なのか」。そういった分け方をしながら、たくさんのターゲットモデルを考えて打ち出しをした方が良いのではないかと考えている。
- ・ 今であれば、やはりAターンの「経験者」「未経験者」「大学生」、それ位の分け方だと思っており、「理系」「文系」に分けたりとか、「部活を特に頑張った子なのか」「アルバイトを特に頑張った子なのか」とか、それぞれに分けた情報発信の仕方が必要だと思っている。
- ・ その情報を集めるためにどうすれば良いかというと、首都圏に学生の支援員の方がいらっしゃると思うので、その方にもう少しヒアリングを強くしていただくとか、情報収集をしていただくとか、単純に就職の相談だけではなく、何に具体的に困ってるのかと

いうことを少し具体的にさせていただいて情報を集めていくということが必要であると思っている。

●竹内健二委員

- ・ 今、秋田県内における中小企業30社の経営者の勉強会をコーディネートしているが、そもそもその中小企業のサポートをするというのは、今は名誉教授になっておられる立教大学経済学部の方の山口義行教授の発案である。
- ・ 3年位前、山口先生のゼミ生5～6人が、「地域経済を研究テーマとしており、五城目町に1度行ってみたいんです」と言っていて泊まり、一白水成の福祿寿酒造さんや鉄工所などをいろいろ見て回ってもらった。
- ・ 移住には至っていないが、Facebookでつながっていると、「私の大好きなお酒」のような感じで一白水成をいつも出していたり、「また行きたいな」というような発言があるので、ターゲットを絞るという意味でいうと、やはり「地域ならではの活躍をしている中小企業のあり方」であるとか、「その地域経済を学ぶ」というようなところからの入り口もありなのではないかなと思う。
- ・ 大学単位ではなく大学のゼミ単位などで、「地域経済を研究する」というようなテーマが一つあると思う。
- ・ また、今オフィスを構えている五城目町地域活性化支援センターは、また入居者が増えていて、今、圧倒的に入居者が多いのが、大学の教授（明治大学、立教大学、東京大学、公立美術大学等）の研究者が多く、やはりコミュニティビジネスを研究したいという研究者の入居が増えている。
- ・ ですので、次の話題に関わるかもしれないが、コミュニティビジネスを研究するゼミの学生というようなところにもアプローチをかけて行くのを、民間の力ではなく、行政と民間でタイアップしてやる事ができれば、一気に変わらぬが、長い目で見たときに可能性は増えるのではないかなと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ コミュニティビジネスの話もあったので能登委員にお伺いするが、例えば、能代の地域に首都圏からの大学生が来るとか、ゼミ単位で招くというところで、何かお考えになっていることはあるか。

●能登祐子委員

- ・ 今、私のところに来てくださってるのが青森公立大学の先生とゼミの皆さんである。やはり地域づくりにとても関心を持ってくださっており、青森でもやっているが能代でも活動したいということのようである。
- ・ 以前に講演してくださった方が、「地域づくりには『住民』、『行政』そして『達人』の

三つのトライアングルがとても重要であるというふうにおっしゃっていた。達人というのは大学の先生であったり、その専門家である。その三つがちゃんと連携すると、地域づくりはうまくいくということであった。

- ・ 若い御夫婦が今年になって移住してくださった。そして、その御主人が「日常生活の中で必要なものを私たちが勝手に取材して、サイトを作ってもいいですか」と言って、ボランティアで能代のサイトを作ってくださり、それがとても人気である。
- ・ このようなことを民間で自主的に始めてくださったというのは素晴らしいと思うし、こういう方達が増えてくると、我々はとてもありがたいと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 地元の当たり前の情報は戻って来る人には分からないというような話は、参考資料－3の裏側になるが、農林水産部会からの意見の中で、「Aターンするときに、奥さんにもちゃんと生活情報を届けた方が良いのではないか」というような提言もいただいており、そこにも繋がると思う。
- ・ 竹内委員は秋田に来られた際、地元情報はどのように仕入れたものか。

●竹内健二委員

- ・ 私の場合は、元々、中小企業の経営者さんたちがいらっしゃって、「困った事があれば何でも言ってくれ」とおっしゃってくれていたもので、本当に何でも言っていると、人が人を繋いでくれて解決してくれた。
- ・ 秋田の魅力の一つとして、人が人を何か助けて「なんもだ」みたいな精神が、目に見えない価値ではあるが、すごい価値だと思う。それをどうやって見える化し、それをどうやって県民の皆さんが誇りに思えるようにできるかというところが大事な観点だと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 移住・定住促進課と地域づくり推進課との連携が当然必要かなと思っている。
- ・ 特に市町村に入る段階での町内への入り方、もしくは事前に空き家やアパートを見た段階での町内会との顔つなぎのような施策まで入れて移住施策になっていくのではないかなと個人的には感じていた。

●加藤未希委員

- ・ 小学生のうちから秋田県内の職場見学や自分の親の職場を見に行くということはあまり聞かないが、子供の頃の感情というものが、大人になって地元でこういうことをしたいというふうに繋がってくるのではないかと個人的には思っている。
- ・ 小学生、中学生のうちから、「秋田はすごくステキなところなんだよ」ということをも

っと知ってもらおうという方向性もあると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 小・中・高ときて大学に行くかということは、かなり家庭差があると思う。もちろん高卒で頑張っている方もたくさんいるので、大学に行くことだけが道ではないと思っている中で、部会から話が逸れるかもしれないが、各高校の存続というところもあると思う。
- ・ 立正大学は、大学卒業後に地元に戻ることを前提とした奨学金を出していたりなど、大学ごとの取組も最近はかなり多様化してきている。
- ・ 羽後高校や矢島高校など、進学校でなくとも高校がその地域にあることによって地域が活性化をしている事例もあり、それに加えて偏差値やテストだけではない就職の仕方、それから学費等の経済的な援助も得られること自体をもう少し、教育委員会や地域の取組の中でバックアップできると、更に戻ってきてくれるという循環ができるのではないかと思っている。
- ・ 県の方から大学に働きかけをしてそういう奨学金を作ってもらうなど何か働きかけをしながら、ただ単にゼミで来てもらう、研究対象としてもらって合宿してもらうということの先を見据えられると良いと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 次の議題、分野 1-2 の「若年女性の社会減対策」について、20 代 30 代の方が進学・就職で県外に出てしまうことに対して、どういうことをすると良いのかということについてお伺いしたい。
- ・ 皮切りに私から。進学ということで言えば、大学という観点もあるが、専門学校が秋田には少ないというところもある。
- ・ これは県として、行政として取り組むことかというところもあるが、どうしても美容系もしくは観光系の専門学校に進学するとなった場合、盛岡や仙台に出てしまうというのは、非常に強い要素だと思っている。そこら辺を対象にするのかしないのかということも選別をした上で対応していく必要があるかなと思っている。
- ・ 首都圏への大学進学はそんなにパーセンテージでいうと多くないと理解しているので、東日本というか東北での進学の可能性を考えたときに、そういう専門学校への対策という観点、そこを対象にするのかしないのかという論点が一つあると思う。
- ・ 就職という観点で言うと、どうしても大卒者が秋田に残るということは少ないと思っている。理由は女性が就職をする役職、職種がないということである。事務職、それから、サービス、接客はあるでしょうけども事務職や営業職といったところで女性の就職ができない。
- ・ 産業振興部会の方に投げかける必要があると思うが、男女の初任給に差がないように

するとか、初任給自体を上げていくということをしないと絶対に県外に出て行ってしまふ。理由は明確で、大卒者でいうと、奨学金を返せないというところが一つ大きな要素であるので、県で補助金で奨学金の補填をしてくださっているということは、非常に有効な手段だと理解している。

- ・ どちらかというと民間の方への働きかけが必要だと思う。
- ・ 加藤委員の周りのお友達で、「戻ってきたいけど来られない」というような話はないか。

●加藤未希委員

- ・ 秋田に戻れば、周りが「まだ結婚しないの」とか、親が「早く孫が見たい」という話題になり、気まずくてどんどん地元を避けていくという話を聞く。秋田独特の要因かもしれない。

●須田紘彬部長

- ・ 部会資料－3 がこの議題に関わってくると思うが、下の方の丸二つ目「人間関係が固定されて辟易する」とか、一番下の「田舎の方はみんな同じがいいという空気がある」ので戻りにくいという意見があるのではないかと思うので、どういうふうに取り組んでいくとそういうイメージを払拭できるのかというようなことも考えていきたいと思う。

●能登祐子委員

- ・ 秋田県は他県に比べて基本給に差があるが、改善できないものか。企業が少なく人口も減少していて、そういうところも影響しているとは思いますが、同じように働いても秋田県は給料が低いということを、多分若い人たちは感じるんだろうと思う。

□久米 寿 あきた未来創造部次長

- ・ 産業労働部の雇用労働部門が詳しいと思うが、自分が見聞きした範囲で申し上げると、確かに 47 都道府県を並べると大卒、高卒及び中卒も含め初任給の平均水準は全産業を統一すると、秋田県はやはり 46 番目というレベルにある。
- ・ それは県経済全体の水準や産業全体の産出額といった大きな話とリンクしてくると思うが、そのあたりは未来創造部としても気にかけており、2 年位前、産業労働部や各産業部門、労働組合の代表者の方による 10 名弱位の審議会のような形で御意見を伺う機会を設けたが、例えば「就業規則を改定して働きやすい職場をつくる」ということについては、企業も持ち出しを多少抑制しながら取り組める部分もあり、組合側とうまくいっている企業さんなどは積極的に乗り出してくれるが、賃上げという形になると、やはり経営戦略の最終型というところがあり、業績全体を単年度ではなく 3 年スパンとか 5 年スパンで着実にかつ計画的に伸ばしていくようなイメージを描いた上で、賃上げにはね返らせたいという意向を中小企業の経営者の皆さんは持っている。

- ・ 特に人を採用するということは、財産を囲い込むということでもあり、その採用者の方に 60 歳までずっと賃金を払っていくという重いミッションを背負うということになるので、採用自体を計画的に進めるというあたりが、秋田県の零細に近い企業はなかなかできてないのかなと思う。
- ・ その審議会でも、賃上げについては、間接的にであれ、行政が言及することはなかなか難しいという印象であった。
- ・ 昨今、コロナによる影響で、「作っても売れない」「どういった新しい生活様式に合わせた製品・サービスが良いか」など、いろいろなところに経営者の方も考えを巡らせるようになってきていると思う。
- ・ 今いる社員、或いはこれから雇うであろう社員、県内の高校生や大学生の皆さんのことを考え、働きやすさであったり、自社が地域社会の中でどうあるべきかというようなことを考える経営者の皆さんが増えているのではないかなと思っている。
- ・ 県の地域振興局では、社長会議という形でやる気のある社長さんたちと行政が座談会形式のフリートークの会合を開きながら、採用に向けて、或いは離職の防止に向けて話し合いを持っているところであり、徐々に機運が盛り上がりつつあると思っている。

●能登祐子委員

- ・ 若者は「夢が持てる」とか「やっていれば仕事が楽しくなるだろう」というように良い方に考えたいのだろうと思うが、今の現実、「本当に夢が持てない」とよく若者たちが言っている。何か改善できる場所があればと感じている。

□久米 寿 あきた未来創造部次長

- ・ 銀行系の調査会社のアンケート等を見ても、高校を卒業して県外の企業を選択される皆さんの理由として、当然、賃金や福利厚生といった勤務条件が出てくるが、必ずベスト 3 に入ってくるのは、「県外を経験してみたかった」「地元を離れてみたかった」という意見である。
- ・ 部会資料-3 の黒ボツにもあるとおり、意識や心理面での圧迫感とか同調圧力といったものが十代の皆さんにあるのかもしれないし、周囲を見渡してネガティブな印象もあるかもしれない。
- ・ 若者には一度外を経験してみたいという気持ちがあるかと思うので、行政機関としてはそこをねじ曲げて地元に残ってもらうというよりは、1 回外に出て経験した皆さんが、やっぱり秋田に戻ってみたいと思った時に手を差し伸べられるよう、その窓口であったり、情報提供といったところをしっかりと構築していきたいと思う。
- ・ そこで我々が悩むのは、情報発信と一口に言っても、10 人いれば 10 通りの生活パターンがあるので、皆にどうやってフックを引っかけるのかということが非常に難

しいということである。

●須田紘彬部会長

- ・ 賃上げというのは非常に難しい問題が多々あると思うので、もう一つ、今の時流で言えば、副業の解禁といったところにたどり着くのではないかなと個人的には思っている。
- ・ 特に奨学金をどうやって返していくのかというところが大きな論点だと思っており、県で支援をいただいているものの延長として、例えば、土日に接客業をすれば、NPO等の補助アルバイトとして地域活動をするというようなことも含めて、副業を推進するというのも一つ可能性としては高いのかなというふうに思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 次の分野2の方に進みたいと思う。項目で言うと3番で、「結婚・出産・子育てに希望を抱ける社会づくりについて」というところで、皆さんから御意見をいただきたい。
- ・ 特に結婚・出産というあたりは、前回の議論ではそんなに意見が出ていなかったと思うので、その辺も含めて、御意見いただければと思う。
- ・ 3番、4番、5番とか特に何番ということではなく、取りまとめてでも結構である。

●竹内健二委員

- ・ 結婚と出産に関する問題点は何かを教えてください。阻害してる要因や問題は何かなのか。

□信田 真弓 次世代・女性活躍支援課長

- ・ 結婚に関しては、秋田だけでなく全国的にライフスタイルが多様化していたり、個人の価値感の変化もあり、初婚年齢が男性も女性も30歳前後ということで、結婚する歳の年齢がだいぶ上がってきている。
- ・ 結婚を選択するかどうかということについても、独身を選択する方が非常に多くなっている。
- ・ 普段の生活の中でお相手となかなか巡り会えないということもあり、県では結婚支援センターというものを、10数年前に立ち上げ、結婚を希望する方への支援を長年やってきているところである。
- ・ 今年1月、AIを活用したマッチングシステムを導入し、それぞれの価値感の合う人たちをどんどん紹介しお見合いしていくというようなものを入れたばかりであるが、まだその効果としては出てきていない。
- ・ やはり一度お付き合いをして少し時間が経たないと成婚には至らないので、システム

の効果というのは、まだ出現していない。

- ・ 部会資料－４の「1・3 婚姻数」では、平成 30 年の実績 3,052 件、令和元年は 3,161 件ということで、令和元年はいわゆる令和婚と言われている部分で、だいたい 5 月の改元時の数字が上がってきているが、思うように向上していない。
- ・ 出生数に関しても、その下の「出生数」では、平成 30 年は 5,040 人、令和元年は 5 千人を切ってしまい 4,696 人ということであった。
- ・ いろいろな支援策を講じており、一人当たりに換算すると子育て支援は全国トップレベルの支援を行っているが、先ほど能登委員がおっしゃられた経済的なところの問題など様々なことが影響しており、数としては導き出せていない。
- ・ 実際にお母さんとなる年代の方が転出超過になってきて、かなり減っていることも一つの問題ではないかと考えている。
- ・ 企業における働き方についても、男性も女性も仕事と子育ての両立がしづらかったり、働きながら子育てするという部分がまだ少し不足なのかなというふうに感じている。

●須田紘彬部会長

- ・ そもそも総数・人口構造として、20 代 30 代の女性の実数が少ないということと、出会いの機会が少ないということ、あとは 2 子以降をどうするかということもあると思う。
- ・ 秋田は首都圏よりも 2 子・3 子を産む方が多いのではないかなというふうに思うので、重点的にやるとすれば、そこのアイディアを出したほうがいいのではないかなと個人的には思うが、加藤委員はどう思うか。

●加藤未希委員

- ・ 結婚相談所のようなところがどんどん増えていって、当たり前のように気軽に登録する感覚で、20 代の最初のうちから先に登録だけしてしまうというような雰囲気になれば、すごくいいのかなと思う。
- ・ やはり周りの誰もそういうふうにしてないと、相談所で相談できる雰囲気がまだないのかなというふうに感じる。これからは当たり前のように出会いを求めて登録だけでも気軽にできるような環境を周りが作ってあげるというのも一つの手であると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ どこまでが行政による支援が必要かという議論もあるかもしれないが、おそらく結婚相談所は一定の成果も出していると思うので引き続きやっていくことだと思うが、一方で、より手前の本人たちに任せた形での支援の仕方ということもあると思うので、そういったところも、検討できればと思う。

●竹内健二委員

- ・ 私の知人も五城目町から依頼を受けて、婚活の取組をいろいろ企画しているが、「結婚」では集客できないのかなと思っている。
- ・ 2月14日にイヤタカのパティシエさんを招いて「チョコレートナイト」みたいな「チョコレートが好きな人たち集まれ」という形や、能代市の天洋酒店さんに協力いただき、「お酒を飲みながら店主がうんちくを語る会」のような形でやった時はいつも定員を超える応募があるが、「結婚とか出会い」みたいなものを前面に出した瞬間に誰も集まらないという現状はある。
- ・ コロナの影響の中で頑張っている飲食店など県内にたくさんあると思うので、頑張っている飲食店さんの集客の支援というようなものにも繋げてながら出会いの場を創出していくということであれば、「1回あそこのお店行ってみたかったのよね」とか、「婚活で来てるわけではなくお酒が知りたいので」というようなことで、まずは出会いの機会が増えるのかなと思う。
- ・ キャンプや防災なんかでも良いかもしれないが、「結婚や出会い」を前面に出さずに趣味とかコンテンツで寄せる活動を県、集めるお店等、集まる人が三方良しの関係性を築いて、月に1回位、継続的にやっていくのが一つあるかなと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ コンテンツに関して同意見である。「これで集まれ」と言った瞬間に来なくなるというのは、非常に集客をするときにはよくある話であると思う。
- ・ マッチングでということ言えば、市町村単位でもかなりやっているの、県がどこまでやるかということもあると思うが、せつかく県がやるのであれば、違う地域の人をつなげるというような地域を跨いだやり方もあるのではないかな。
- ・ 違う市町村の人とやらなければ、「結局出会った人は友達のお姉ちゃんだった」というように、かなり近い人たちが来るということが出会いの阻害になったりすることもあると聞いたこともある。
- ・ 例えば、「内陸線がつながってますよね」ということで角館と鷹巣でやるとか、ちょっと違う地域ではあるが繋がりがあ、隣接してるわけではないが移動はしやすいなど、そのような観点で地域を繋いでやれたら良いのかなと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 子育てサービスや出産におけるサービスも含めて2-5の部分の議論が少なかったかなと思うが、加藤委員いかがか。

●加藤未希委員

- ・ 市町村によって出産祝い金や保育料助成などの出産・子育て支援、乳幼児や小中学生

等の医療費助成などが違うという話をよく聞く。

●竹内健二委員

- ・ 産後間もなくは実家でお母さんお父さんたちの助けを借りて、ということがあると思うが、昔と今では子育ての考え方が大きく変わってきているはずであり、実家で子育ての方針が違った時の心理的なストレスを緩和するようなサポートも大事なような気がしている。
- ・ 加藤委員がやられてるように、たくさんのお母さんたちでたくさんの子供を育てるということは、本当に楽しいことであり、そういうところに通ってるお母さんは、子どもが3人4人当たり前である。家の中ではない第三者的な話せる場というのは本当に大事な存在だと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 竹内委員の今の話で、ポイントは2点あったと思う。子育てで悩んだ時に第三者的に相談ができるような場と、「初めておじいちゃんおばあちゃんになる講座」みたいなもの。
- ・ 気構え、時代の違いや子育ての違いなど、そういうのを学ぶようなタイミングがあっても良いのかなと思った。

●加藤未希委員

- ・ チェリッシュで保育園を運営しているが、保育園にいと一時預かりの需要がすごくあり、聞いてみると、幼稚園の一時預かりが今はほとんど受けられない状況であり、どうしても預かって欲しい時でもその日1人だけしか預かれないという場合は、もう朝から並んで一時預かりを確保するとのことである。
- ・ 一時預かりを運営していくには、まずスタッフが1人必ず入らなければいけないので、やはり人件費の問題が結構ネックになる。お母さんが1時間800円とかで預けて、そのままスタッフ1人分の時給としてそのままなくなるというような形であり、一時預かりでの運営というのはどうしても難しいと感じている。
- ・ また、「リフレッシュに美容院に行きたい」というような自分の都合のために子どもを預かって欲しいと思っても、それを何となく言い出せないというお母さんがすごく多い。例えば「病院行かないといけないから、どうしても預かって欲しい」というような形の預け方しか何となくできないという話をよく聞く。
- ・ チェリッシュでは、もともと親子カフェをやってから保育園を始めたので、「ちょっとリフレッシュで美容院に行きたいから」という気軽な感じで預けられる雰囲気があるが、そういう場がもっと増えれば良いのかなと思う。
- ・ ずっと子どもと一緒にいると、やっぱり疲れてしまうので、誰かに少しでも預けてリ

フレッシュして、「また頑張ろう」というような気持ちになれるような環境というのはすごく大事であると思っている。

- ・ 託児だけで運営していくとなると、スタッフも毎日託児があるわけではないという状態で職に就くというのは本当に難しいことなので、やはり運営していくのは難しいことだと思うが、一時預かり専門の場所が子育て支援の場としてあれば、ママ達の心の支えになると思う。

●能登祐子委員

- ・ 加藤委員の意見に同感である。
- ・ 私たちが望んでいることは、30分とか1時間でいいから、ちょっとだけ育児から離れた時間が作れないだろうかということである。
- ・ 我々が子育てをしていた頃は、育児をしている時にランチに行く、子供を連れてご飯を食べに行くという発想は全くなかったが、今の方たちはそれが苦ではないようである。
- ・ 一緒に子供を連れてご飯を食べながら、みんなが同じ状況、立場であるからこそ語れるという考えのようであるので、仲間作りや相談ができるような子育て支援の拠点を身近なところに増やすことができれば良いと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 次の分野3の女性活躍にも関連するが、職場に復帰するという段階で週1日とか週2日位から少しずつ仕事に慣れていきたいというニーズは結構あると思う。
- ・ それで保育園は預けられないので、一時預かりがもう少し充実していると、女性活躍についても進んでいくのではないかなと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ それでは分野3に進みたいと思う。項目6「女性活躍の促進」についてであるが、女性本人に対して、新しいチャレンジや仕事をするということへのアドバイスといった本人についての観点が一つと、働く環境に関する企業側への働きかけの2点の視点があると思う。どちらでも結構ですので、御意見を願います。

●竹内健二委員

- ・ 今日の議論を踏まえて、先ほども能登委員から企業の賃金の話もあったが、やはり一つは起業、須田部会長から御意見にあった副業というような方向性が一つの解決の道であることは確かなのではないかなと思う。
- ・ やはり女性の20代30代の社会減という問題があるので、起業という分野に関しても、そういう方々がどこかに働いてという基軸ではなく、「仕事がないなら作る」と

いう、20代30代女性向けの起業の支援のような形も複合技としてはあるのではないのかなと思っている。

- ・ もし「県内の企業で就職しても賃金が低いから、仙台や東京に行かざるを得ない」という仮説が確かにあるのであれば、それは就職をするという選択しかない中での判断なので、なかなかそこを阻止していくというのは難易度が高いと思う。
- ・ 今、県で実施している若者チャレンジ応援事業というのは素晴らしいと思うが、対象が広いかもしれないので、20代30代の女性が「自分の本当に好きなことをビジネスに」というところの初動の段階を県で選抜して支援し、それをPRしていくと、「自分のライフスタイルで好きなことを仕事にし、結婚・子育てももちろん諦めない」、そして、「それをどんどん推進しているのは秋田県です」というPRがしっかりとできていくと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 若者チャレンジの事業についても、こういった20代30代枠や、ある課題を解決するアイデアというふうにテーマを絞るように、この事業の中でもそういった絞り方をしても良いのではないかと思った。

●須田紘彬部会長

- ・ 女性活躍関連で他に御意見はないか。子育てとの両立の部分、企業としての制度の部分、起業、あとは女性の役職を増やすという観点もあると思う。
- ・ 加藤委員は、周りで女性活躍の促進が阻害されていると感じるようなことはないか。

●加藤未希委員

- ・ カフェの講座の中で「お仕事相談会」というのもやっており、今ずっと働いていて結婚したことで転職を考えている方であったり、子育てに集中するために仕事をやめたという方もいたり、いろいろなママたちの声を聞く。
- ・ 子育てしながら働きやすい環境を求めている方はたくさんいると感じる。子供が風邪を引いて仕事を休まなければいけないということが続くと、「また休んじゃう」、「また休むと言にくい」と気を使ってしまい、最終的には「やっぱり仕事をやめようかな」となってしまう方が結構多い。
- ・ 私の職場はママしかいないので、「お互い様」という感覚であるが、やはり職場に男性の方が多くないと気まずい思いをしてしまうのかなと思う。
- ・ そういった女性の方々が、お互い様というような形で、お互いがフォローし合えるような環境を整えられる企業さんが増えれば、もっとママたちは働きやすくなると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 企業の方にお話を持っていくと、「だから女性を採用しない」というような言い方を
する企業が少なからずあるなという懸念を持っていた。
- ・ 理由としては、「子育てとか子供に何かあった時は女性がやるもんだ」という頭があ
ると思う。
- ・ もう少し男性の家事育児への参画というところを推進できるような取組というところ
をしていかないと、「女性は子供に何かあると休むから雇わない」というようなこと
になると、社会進出を阻害し、対応性のない社会になってしまうので、そこら辺をも
う少し、「自分も体験しているから大変だよね」と自分ごとになって快く送り出せる
ような形になれば良いと思う。

●竹内健二委員

- ・ 「女性活躍推進企業」を秋田県独自で認定し、その認定が取れると「女性の採用に何
か優先的にメリットがある」というようなことが必要ではないか。
- ・ やはり企業を動かしている論理は、何だかんだ言ってもきちっと事業が継続していく
ことへのメリットになることであり、ゴーイングコンサーンにおいて重要な、例えば
「人材採用に有利になる」、「金融機関と連携して融資の金利が抑えられる」というよ
うな、何かそういう具体的なメリットとセットで提案ができると、乗ってくる企業さ
んはあるかなとは思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 次に項目の7「ワークライフバランスの実現」の方に入るが、何か御意見はないか。

●能登祐子委員

- ・ 今、大企業を中心にリモートワークや在宅勤務が多くなっているが、時間のないお母
さんたちにとって、育児をしながら仕事ができるというのはとても理想であると思っ
ている。
- ・ 例えば、県の事務的な仕事を育児中のお母さん方が何かの組織を作り、そういう仕事
を受託するというようなシステムづくりというのは可能なものか。

●須田紘彬部会長

- ・ 私の方から情報提供させていただきたい。今、市民活動として「プローマー」という
女性の社会活動をやっている。
- ・ そちらの方で今後進めていきたいのは、例えば県だけではなく民間企業も含めて、そ
ういう事務作業などを団体として受託し、しっかりと秘密保持契約を結んだ上で、マ
マ達が3人、1人分の仕事を3人チーム体制でやっていくというものである。

- ・ 3人がしっかりと情報共有し、何か事務的なことをしたり、単純な作業だけではなくイベント事務局、例えば、どこかの企業の100周年式典のような社内プロジェクトみたいなところを外注で受けるということをやりたいというふうに進めている。

●須田紘彬部会長

- ・ リモートワークについて県の方から何かあるか。

□久米 寿 あきた未来創造部次長

- ・ 第一段階として、県職員自らがリモートワークなど外部で仕事ができる環境を整備し、その整備の過程で、こういった種類の仕事がそれに適するかという仕分けをハードソフト一体で進めていかなければならないと思う。
- ・ また、軽微な入力作業をやるとしても個人情報のあるなし、或いは関連しているシステムにアクセスする際の情報流出の防止など、セキュリティー面においてもいろいろな課題もあると思っており、現状ではなかなか一足飛びにはいかないというのが実情である。

●能登祐子委員

- ・ 民間へのリモートワークの推進や協力体制を作っていくことは可能か。

□久米 寿 あきた未来創造部次長

- ・ これから国も地方における働く場の整備というようなことに補助やサポートをする仕組みを作っていくと思うので、活用可能な制度の紹介やPRという形で民間サイドにおける普及をサポートできると思う。

●須田紘彬部会長

- ・ ありがとうございます。
- ・ 次の項目8「若者活躍の促進」に進みたいと思う。より若者がチャレンジできるような地域になるために必要なことはということで御意見いただきたい。
- ・ 以前、能登委員から、もう少し地域活動に若者が関わることができればというような御発言もあったかと思うが、どうしたらそういう人たちが参加してくれるか、もしくは何が阻害して、彼らは参加しないのか、その辺はどう思うか。

●能登祐子委員

- ・ やる気があっても資金がなくて夢を達成できないという若者が結構いるので、サポートをしていただけるシステムを考えていただけると嬉しい。

●須田紘彬部会長

- ・ 私も若い人たちの一番の悩みは、資金不足でアイデアがあっても行動力があっても動けないということであると思っている。
- ・ しかし、ただ公費で補助を出すことだけが解決策ではないと思っており、例えば経済界に働きかけをしながら若者に向けた出資をするとか、大きな会社の中の一つの社内ベンチャーのような形で、その社員として1回入ってもらいながら、新しい事業が軌道に乗るまでは会社の中で育ててもらい、その会社の仕事を半分してもらいながら、半分は自分の活動をするとか、何かそういう動き方ができるような柔軟な働き方を経済界に働きかけていくというようなことでも良いと思う。
- ・ また、今はクラウドファンディングが有効な手段として活用されているが、そうした多様な資金集めの方法があるということを提示できるような機会があれば良いと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ それでは分野4「活力にあふれ、安心して暮らすことができる地域社会づくり」の9から12の項目に移っていきたいと思う。新たなコミュニティ形成、集落機能の維持といったところについては、前回御意見がなかったと思うので、4-9と4-11あたりの御意見をいただきながら、全体の話でも構わないので御意見をお願いしたい。

●能登祐子委員

- ・ コミュニティを継続するためのノウハウ等の情報提供・相談体制の充実を県にはお願いしたい。

●須田紘彬部会長

- ・ 県の方からも、課題や「こういったことについての意見が欲しい」ということがあれば御発言いただきたい。

□橋本 秀樹 地域づくり推進課長

- ・ 地域づくりとは大きい広い概念であると思うが、我々はNPOなどの市民活動や、そこから派生する多様な主体の社会参加の部分、中山間地域の集落や人口減少・高齢化などで立ち行かなくなっている集落をもう少し大きく広げて考えて維持するような仕組みづくり、そして各論的には、地域交通や買い物支援など様々な課題を取り扱っている。
- ・ そうした課題がすぐ目の前に近づいているところもあればそうでないところもあり、秋田県内でも、町部と農村部の集落では課題も微妙に違うことから、一つの社会政策で一気に解決できない部分がある。

- ・ そのため、一つ一つの地域の実情に応じた施策を縦横の関係でやるしかないと思っている。
- ・ 日本全国でもいろいろ優良事例があり、それを応用しようともするが、一方での成功事例が他方で必ず成功するとも限らない。
- ・ 県や市町村が必要だと思っていても、地元の理解、地元の当事者感覚がなければできないこともたくさんあり、そういう中で試行錯誤しているという段階のため、委員の皆さんには、何か一つのことではなく、様々な場面でのことをたくさん御提言いただき、その中から一つでも実現できることを拾いながら考えていきたいと思う。

●須田紘彬部長

- ・ 今の話を受けて、やはり各町内会などの現場でかなり泥臭く意見を継続的に聞いていくようなことが必要であると思った。
- ・ マスで考えなければならないもの、例えばスモールタウン構想のようなものになると、地域の存続と現地の方の意見が必ずしもイコールになるわけではないと思う。その辺も今後の地域づくりを進めていく上で必要になってくる議論なのではないかと思う。
- ・ 地元の企業とのタイアップも必要だと思うが、地元の企業さんだと、なかなか人を割けないなど体力面の問題があり、企業連携が図れないということも企業や地元で活動されている方からも聞くので、もう少し大企業の地域貢献活動の中で連携が図れたら良いのではないかと思う。
- ・ 例えば、地域のコミュニティバスを運営する資金自体を、大手の運輸系の企業と組みながら簡単なスポンサーなどをしてもらうような仕組みを作るとか、企業誘致の関連で営業しているような東京事務所や名古屋事務所などの方もいると思うので、そういった地域へのスポンサーというのも同時に声をかけて回るということもできたら良いのではないかと思う。
- ・ 結果的にそれで支店が出たり、何かしら別の取り組みをやったり、地元の企業との取引が始まるというような別の切り口による地元との繋がりができたら良いと思う。

●能登祐子委員

- ・ 県庁のサイトに「元気ムラ」というのがあり、そこに大変支援していただいている。必ず県の方が取材してくださり、我々が活動している内容を元気ムラのサイトに載せてくださっている。
- ・ 改めて自分の活動を再認識できるということ、知らない地域の人たちの活動が良くわかるということもあり、是非このサイトは続けていただきたいと思っている。

●竹内健二委員

- ・ 我々移住者が働いている五城目町地域活性化支援センターの存在は、地域のおじいちゃんおばあちゃんたちからしてみると、「何をしているのかわからない」という溝があり、我々も「是非足を運んでくださいと地域の方々向けの説明会みたいなものを何回もやっているが、なかなか溝が埋まらない。
- ・ 今、県主導でワークショップをやっており、初めて語り合えるというところがあるが、そういう機会がなければ、若者が創ろうとしているコミュニティと、もともと地元でずっと暮らしてこられた方々との溝はなかなか埋まっていけないと思う。
- ・ お互い気になってはいるが、お互いが踏み込めないからお互いの良さがわからないという状況があるような気がするので、地元でずっと住んでいるおじいちゃんおばあちゃんたちのニーズをもう1回掘り起こして、人生の先駆者の方々のために何かお役に立てることができないのかということをし組みとして作って、そういう事例をどんどん各自治体に発表していったってノウハウを貯めていくということにより、地域が一枚岩になっていくのかなと思う。

●須田紘彬部会長

- ・ 加藤委員がやられていること自体はコミュニティビジネスだと思うが、自身の活動の中で、「こういう支援があれば」とか、「こんな課題がある」といったところをお聞かせいただきたい。

●加藤未希委員

- ・ チェリッシュ自体、たくさんの企業に支えられて今活動できているので、やはり地域の企業との連携はとても重要であり、そこを繋げる人というのも必要であると思う。
- ・ 秋田を一緒に盛り上げていくというような方々が増えてくれば、コミュニティビジネスで活動してくれる方々が多くの地域で増えてくるのではないかなと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ 一旦、全体を区切らせていただき、分野の1から4まで12項目あったが、その項目以外のことでも、言い忘れていたということでも、何か全体を通じて御意見はあるか。

●竹内健二委員

- ・ 結婚・出産・子育てというテーマがあったと思うが、やはり結婚はなかなか難儀するなという感想であり、「子育て」にキーワードがあるような気がする。
- ・ 子育てとコミュニティビジネスに手厚く支援をしていくというところが、秋田県がいろいろ抱えてる問題を突破していく切り口になるのではないかなと思っている。

- ・ 「本当に子供が育てやすい」、「こんなに支援がある」、「こんなに生き生きと活躍している方々がいる」というところにかけていくということが大事なのかなと思う。
- ・ 子育てをしていく環境というところは東京にはないので、必ずそこが浮き上がってくる魅力になるはずであり、私みたいに縁もゆかりもない人が来ることもあるが、何かしら秋田と接点を持っていれば、そのところの確率を上げていくというのが、戦略としては確実な方向なのかなと今日は思った。

●須田紘彬部会長

- ・ 是非私も強調して申し上げたいのは、子育て支援というと女性活躍、女性支援となりがちであるが、男性の意識改革や男性が子育てノウハウを学ぶ場がないなと思っている。

●須田紘彬部会長

- ・ あとは全体について、よろしいか。
- ・ それでは議事の２番その他について、事務局より連絡をお願いします。

□事務局（加沢副主幹）

- ・ 部会の３回目は、前回調整させていただいた通り９月８日、火曜日に開催させていただくので、よろしくお願いします。
- ・ 次回の部会の進め方については、今日頂いた御意見を受けて提言書の案という形に一旦まとめて次回提示させていただき、そちらに対して再度御意見をいただくという形でやらせていただきたいと思いますと思っている。
- ・ 最終的な提言書については、次回の３回目の部会終了後も委員の皆様とやりとりをさせていただき、９月いっぱいを目途に完成させたいと考えている。
- ・ 本日お聞きいただいた中でも御不明な点などがあるかと思う。随時、事務局の方にお問合せいただければ情報提供していきたいと思う。
- ・ 事務局からは以上である。

●須田紘彬部会長

- ・ 他に御連絡のある方はいるか。
- ・ 議事は以上となるので、事務局に進行を返す。

□事務局（佐々木主幹兼班長）

- ・ 長時間にわたり、熱心に御審議を賜り、ありがとうございました。
- ・ 以上で、第２回ふるさと定着回帰部会を終了させていただく。

以上